

語りを質的記述的に分析した。その結果、死別が与えたポジティブな影響として、①個として生きる ②人生観の獲得 ③夫の見守りが抽出された。そして、これらのカテゴリが、妻のその後の生活にどのように作用しているのかを考察した。その結果、患者、家族共に納得のいく闘病生活、穏やかな看取り、信頼関係に満ちた関係にあった対象者は、喪失悲嘆をかかえながらも、死別経験からポジティブな面を獲得していた。それらをその後の人生の支えとして、様々な生活の局面に生かし、新たな人生に向かい、客観的にも主観的にも健康的な生活を送っていることが明らかとなった。

11. いきがいがないという苦しみと、いきがいをもってほしいと願う苦しみ

原 敬 (さいたま赤十字病院 緩和ケア
診療科 緩和ケアチーム)

痛み治療により杖歩行できるようになった方が呟いた。「歩けるようになって友達と食事やカラオケにも行けたけれど…でもそれだけ。肝心なところは何も変わってない。こんな風にして生きていたって何の*いきがい*もてない」。

痛みが軽くなり歩けるようになった。痛み治療は確かに役に立った。医療者には達成感を与えてくれたが、この方には“それだけ”のことだったのだ。がん医療とくに死の臨床の現場ではいきがいが問われる。それはなぜなのか？いきがいの何が問われているのか？ 本発表ではそれを考察し、援助者としてどのように向きあえばよいのかを論じてみたい。わたしたちがいきがいというとき、いきがいの対象そのものを指すときと、いきがいを感じているところの状態を考えるとときがあるだろう。終末期患者がいう「いきがい」とは、たとえば、この子はわたしのいきがいですというときの対象そのものではなく、この子がいるにもかかわらずいきがいを感じられないというところの状態を指すのではなかろうか。いきがいの対象はそこに実在しているにもかかわらず、自分自身の死によって「この子との関係」が近い将来に絶たれる確信のなかを生きることの無意味という苦しみである。いきがいのなさを訴える患者に向きあうことは、いきがいをもって意味ある時間を生きてほしいと願うわたしたち自身も苦しむことになる。いきがいのなさに苦しむ患者の姿が、わたしたち自身の無力感を際立たせるからである。いきがいの対象を憶測し熱い思いで相手に〈あてがう〉ことでは、自分の達成感を満たすことはできても患者のいきがいは回復しない。また、できることはこれしかないと思いを逸らし症状治療だけに閉じていく態度は、患者を孤独にするだろう。いきがいの対象との関係が見直され、死によって左右されない生きる意味に患者自身が気づき、新たに切り拓かれた生きる意味のなかで、いきがいははじめて回復するのではなかろうか。

〈セッション3〉

口 演

12. 当院で行った終末期医療に関するアンケートについての考察 (2006年調査との比較)

鈴木 隆¹, 平 洋², 倉林しのぶ²

(1 はるな生活協同組合

高崎中央病院 通町診療所)

(2 同 倫理委員会)

高崎中央病院倫理委員会では2014年5月に患者・職員を対象に表記のアンケートを行った。患者557人、職員197人から回答を得た。当委員会では2006年にも同様のアンケートを実施し、患者・家族634人、職員144人が回答している。今回のアンケート結果のまとめとともに前回との比較についても報告する。アンケートの主な質問は、病名・予後の告知、終末期医療について考えたり話し合ったことがあるか、延命治療について、終末期医療の代行判断者について、リビングウィルについてなどである。回答された患者の年齢層が前回に比べ大幅に上昇した。受診者の高齢化、外来での調査時間帯 (今回は午前中のみだった) などの要因が考えられた。年齢による違いなどは当日報告する。癌など不治の病の病名や予後の告知について、自分が病気になった時、家族が病気になった時それぞれを尋ねた。全体として自分が病気になった時は知りたいが、家族がなった時は本人には知らせないでほしいという傾向があった。しかし、家族がなった時本人には知らせないという回答は06年: 45%に対し、14年: 23%となっており、本人に知らせていくという流れが進んでいることがうかがわれる。終末期の医療について考えたことがある人の割合が、06年33.5%? 14年52.7%と関心を持つ人が増えていることがわかる。終末期医療について誰かと話し合ったことがある人は43.6%あり、話し合いたい相手は家族が74.2%だった。不治の病の心肺停止時に延命処置を望むかという問いでは、本人・家族ともに望まないと答えた人が前回よりも増えていた。リビングウィルを作っている人は、06年: 3.3% → 14年: 8.5%と増えていた。関心を持つ人が増え実行が始まっているが、まだ一部ともいえる。

13. 終末期がん患者のいきがいとは

茂木真由美¹, 新垣江梨子¹, 青木 敏之¹

井草 恵子¹, 肥塚 史郎², 風間 俊文²

(1 群馬県立がんセンター 緩和ケア病棟 看護部)

(2 同 緩和ケア病棟 緩和ケア部)

【目的】緩和ケア病棟の患者・家族のいきがいに関わる日常生活援助を調査、検討した。【方法】調査期間: 平成26年6月開棟から3ヶ月間。対象: ①全入院患者64名。②多職種介入を調査。(多職種とは、医師、看護師、臨床心理